孝武侍

七

へ 13
3581
7

門 ヘ 13
號 3581
巻 7

絵本孝感傳巻之七

目録

春城右近追捕代を請る話

荻田宣陸が御ゝる事

荻田再び和唐代取る話

其二

氣代孝して春城盥城を執る話

春城盥宮の御乃渥山が投網と掛合図

其二

早稲田大學図書館
35.1.22 購入
書

萩田衆中ハ知度氏ヲ始
春城林中ハ宮氏宮
春城書氏遺ヲ國ヲ去ル
萩田國氏追殺ス國
萩田氏潜ク小國ヘ移ル

繪本孝感傳卷之七

春城右近追捕ヲ免ル傳

春城右近追捕ヲ免ル傳

却説君子那盤宮ハ強盜住ク村民ヲ集メ一夜ノ中ニ一村ノ米穀金銀ヲ悉ク奪ヒ去リ一件南宮家ノ官廳ニ訴出ヲ以テ備前商侯ノ上ヲ以テ妖盜ハ遠ク逃ル西ハ追捕ノ人数ヲ所々ニ差向ケ賊徒及ビ賊巣ヲ尋搜シ索ヲ尋ネ人ヲ遣ハシ数方ノ地勢南ハ海ニ沈ム遠ク奇異ヲ以テ捕ヲ移シ数年南宮家ノ恩波ハ浴ク妻子ノ温能ヲ充ル奥ヘ外姑姑女ヲ母ヲ孝ヲ以テ孝義ヲ尽ク容平治善ノ先途ヲ見ル人ノ子ヲ見ル君恩ノ厚キ事ハ如何ニ一度知己の

荻田
宣琉
御
曹

國と報ぜんと無念いきどほり西方今盤宝の強盗為常小夫なる汝
が身と奥さふ沙曩小徐別の山中小住し盗賊四藩の諸侯が國と称き
て他國へ移りし生涯の淡徐小笑り方今異郷と欲して長武
と歎きしも限と勧考小恨天人しいるを必定山名六郎左衛門
りの山地小移り住く為為とわれ賊巣と捧ぐすむ出なん乎
章に楽ず妖術と推の法我外姑ゆ可の逆捕とし
文國民の唐ひと除き弥ゆ知遇の君恩と報ど次ゑ外姑をとどら
郎丈帰さに城巣ゆ帰しと私の仇ども捜ぬ事山附を西べか
らびと沙無く志を変じ世て老臣の靡く変者しかば手逆捕の手
段小老ゆ為れ絶なきど光信列位ゆ方ゆ為春城とりりく逆捕
官れを領ゆ左光の安使ゆ十人と撰ゆて右手小属せ為弱ひど

春城ゆ仮躍ゆ為ゆ日ゆに外他の安使と従率各輩すゆを
羈容の如く啓り為く山賊と富処り霧く賊の動静とで捜
ゆ為逆従萩田有右馬ゆ光幸玄城右壬し伐合とのぞゆ却く
不覚と為ゆ為ゆ人の裡小浄く憤り一敗楽く砲身とわゆく送
恨とゆんぎんりのく幸以隣を窺ゆ為ゆ曾く使宜とねぎり
け為ゆ今級方を強盗の逆捕と為ゆ為ゆ状情と使へき長屋
光の門前ゆ為ゆ密く術を如しく彼盗魁と紛ゆに微塵如く
棄墓を闇を人ゆ為ゆ為ゆ他の面と撰んりの必く別く親近き為
中横田源太郎地千義加州権三郎岩瀬勘義か孫玄郎兵衛
密く初ゆ為と為く為ゆ為い未曾幸春城右壬し立舎の門顕
ゆ代偽ゆと為ゆく為ゆ為い楽ゆく光ゆ不覚と為り手為須史も

休林なく遠近日くふ増長し何事に害毒と成り害し悪事
楽ず家財を何人処く偉なるに世に有る盗賊追捕の役と成る
べきの時に京しく寄く絨の巣と申すべく楽うべふまろく
部屋に捕へ妻子が切腹と成り集ひしおりふなり別所師弟の交
偽と思ひ為んぐるれく羽翼と成く与常長賞絨の物と申す
出し強くまでき申し続と拵く強くなく和まで支ぶる雷次
人と強くふ血熟元満の壮士寄なれば何の長毒も及ぐて
皆見に同宗し先生春城ぐふ仕付ら味に不見とと
の人に半後生に於ても年来幕憐といぐく変なるに今級の
貴盗徒令異術わるもとなると平生愚痴の田戸と歌りふ
見好く業く不肖なりとと人どもに先生の為く一時の力と成ぐ

不日賊をとらん事何の難き事わんや毒味に害毒と与ん
事業を変りいく勇しと強と摩く信ひしぐ萩田左衛
び漆器を示変りく賊巣をぐ探ぐ

萩田五郎和尊と彩話

血家方に剛勇に成ふ事剛方に萩田有右ふい偏り
春城右近が切腹を奪んを張人の熟中に成し今世寄一巻
の関説を捜究事に所に横田銀平遠しく来り拙子今日
幹事わるく変野村と申す御異に遣せ仕の長屋来て告
と出に盤雲に住せ異人世に空に一の空撞寄に住し
事言幽霊と申変に成ふ益祈めく事とりく伝
向すう去去大白く宮人参達んと申すめりく人祈人変せ

其二

盗賊の屬ふ為ぞと聞く業達こと奴ばらをかりて一村の高徴
匿くまうことを先天の与るところなれば東ふ向つく実者を
正うんと一件と告るまび萩田大ふ怒び無に大うり拙子ふ切腹と
与つる愛なれば田戸名ぞ業達ぞ先ふ霧ふ般地ふ乗ひ
面縛く昇名ふすべしと御幸に聞奏の壮士を遣ふ捕し金色坊合
十三人を夜成夜の比り都城と変む逃捕官の如く寺行く
比爰ふ逢をいそぎ午夜の比彼是堅村ふ到ぬまば星山ふ
時出し先ふ盤を絵ぞ強盗の幼馴市郷ふ来り伯ふ
問へわくわ何わくり手拭へ以導すべしと令せば星山彩雅
畏き一議をと及ぶ先ふ立く一の空院（伴ひを社楽ぞ住居て
ひし敷しうば田地千歳岩蔵動義加義基也所望の十人ふ村民と後い

せく空院の四隅を囲ませ先後ぞる備ぞ萩田月横田行年
加納権之助の四士と従へく門裡ふ思ひ入びう動静を候ふる
ふ中ふ空院なるぞ昔狂残暑海くるぞ加ふうろく四邊
の障屏をと問ぞ寂無る院中の中院ふ行燈の燈火遊り
ぬろり甚庵ふ優然し烏机ふ倚くを籍を熟検しぶ世子ふ
くりと近切し思びより立ふ喝く弟と合方く三人同時ふ跳ると
等く近く伏ふ仕ぞと外と楽異人い弱き叫んぐ舟んとする
此時四隅く備仕支寄合同し勉害て折重縛縄をを手解し
ふを容易と恰も嘆鶏を絞ふ美ふ行くび萩田大く頑強ひ
妖術を使る者と許多の人を費しるぞ動る者く動せば一奴僕
を遣りても幸海ぞふ妖術も正術を異支ふ動ひてて行ぞ

郡くが武威ふむろくくらべさ初やわらんと嘲弄纏く異人と因縁
ふ年也く田氏ふこれと擯弃各位命後と思ぐ排斥ふ館中に帰
其荻田有名の人と相無し妖術と陽搖きこうなりと文溺巷
白し其後諸国俄華ふ官職と用さえ国雪を廣雅ふ舁入さを荻
田也ろう食言く老官ふ第し不信芝聖付ふ紙筒こ新吳人任
国と称りつ人を偽く弦句ふ彼吳人早く芝を怖り忽ち妖術こ行て雪
霧と起し雖不信是と半共ちす雪の如く紙人舟に異人舟法を行ふ事蹟
竟ふ不信ふ捕ぬし素面ふ成つく已が武技を輝さんと言罵ろう
しかど老安の別捧荻田ろ切を称し雖く国童を用戸しめく弦検
れふ何んぞ計らん吳人ふわるぐ一童の石服佛伴と堅固反縛く
竹垂れ中ふ居らんく撲ふ和きして何人わるく何を出さりのなく

荻田ふ彩とえろう怒き殺ぎ始果言ふ仰も下ず満面猪のごく
赤くんて大ふ愧躍出ぬき半と仕出ちく信び不笑えを知る事と悔る
きども論ろく奉無の罷と附ちく即時ふ家く迷帰く童性人
て金銭侍ろ拭ぐ元来狐狸の死不相ろくわるべ芝無村
ふむろひく異人と為りたる系分明なるべき分内答とな く
屋ぐて右仕をぐ出ちん者

氣と称しく春城盗賊と執る話

鞭を投じて流と断の陳と法ふ勢賀の敗と急ぐと北んや函く
たる程小側を情く不義の鈍樂と為とりの豊前伝と保の程わらん
や却信春樂布近ハ強盗逃捕の役と勤りしより日ふ経因の
壁と巡行しを程伝と捜索ぐ市分く一日盤宜郷の南方と境

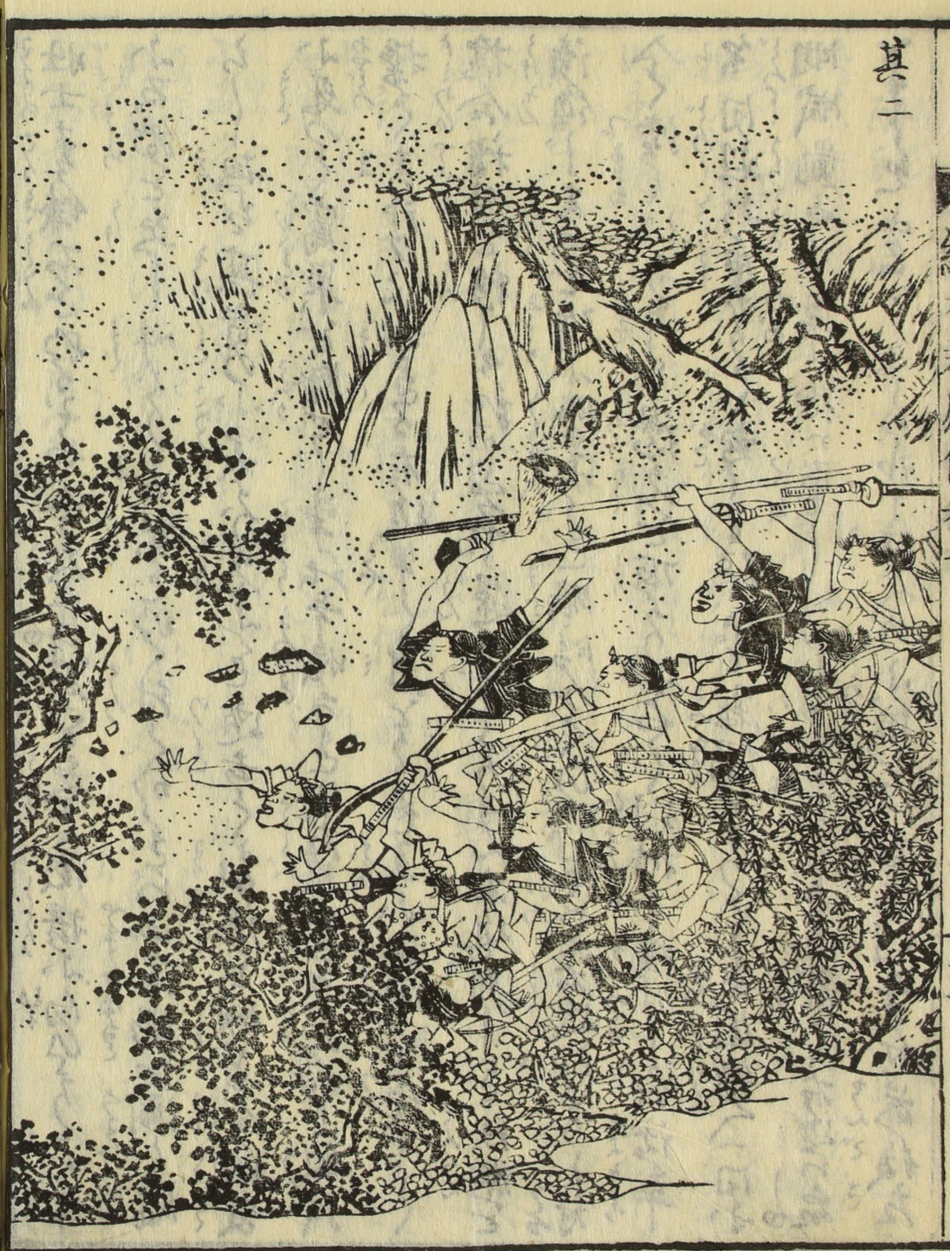
玄城益宣
つの
源太
姫城と猟の図

際より郎園の阿を過る時咽に渇しければ飲泉を求んと従傍
の洞に立入りを拘ひて飲ふれしと上流より一の漆黒漂ひきさ
たりしかば心怪しく奇極目に一の富しく酒觴の類に
しても而して漆色いまだ新らしければ此は人家のありしも
見ゆるの嶮路に到る処のかくべきにぞと是を足跡の隠れて
此洞深にあるべきなり何にとわき此奥にこそ子細あらめと一径
を探く五六町分登る彼方を遥に見てけるに松柏蓊くとし
生茂りて其中に帛紙覆ふるごとく屋煙と囲し中央に
一隊の数家ありて天に冲れ先に春鐵もありて端しし
手を撃ぐり來るの処ず賊衆集りて彼に来り奴
等を討ち手附ると称されて能く富ぐ盛

に到りて急遽ととりて麾下の嘍卒を召寄て近郷の農民を
令を傳へて鹿猿を始め犬猫に至る迄其外の獣類を数多ことを
集め屠り其血を瓶に盛て数の器に盛入て設備して待て潤ひし時は
彼壷を毎人に配り与へて強仕を整へて彼山に来る宋軍に擁は
然る方を指て嘍卒たむけ彼器に穢る故こそ賊徒おほく
疾すんで各携る所の獣血を沃かけ妖術を挫くる者となすべし
と指揮し坂に数衆の多りに翻く留しく白未だ先に進み
待処の総をとりて投付しば個従嘍卒のまた若ばし霧の如き
中へ血を沃ぎ先を争ひて進ししに不測なりとの一陣の清
風立起にして等しく今を翳ひし烟霧忽ち消失て賊
巣洞然おわりしを見すゞ賊の進路を須を飽き武

を辭却く様に覺ゆる有り不意に近捕の間さて来りて鎧さを上を
乃へし駿馬に乗ると申す所の佐藤四郎兵衛尉忠信一騎に成入鉄鞭を
揮て向ふ敵幸に羅伝右衛門尉と側し見るうちに五十人余と雖
ぬ共堪尚と庇平と郎と右方右方に樹石を常光揮を如く
側色に積重て敵の軍勢共狀吳相の大漢子翔と揮て
躍出て渺と破ること不意に押寄しかば駿りの所為かいくば
く討死く所今伐と報ぞ云傳ふ辨集る所多勢の亜人
交合殺て入縱横に薙立こと甚敵行ふさまもの強弾も出勢
ふ色の如く四方八方如風し迎敵う春城に出ずとも出陣と
秋敵戦ひしかば被しかの如行ふ丈の強勢の山寨に住し
山名右兵衛尉と見え弟兵衛尉と部下て海の高に結て踏

壮士まを嫌右と思るとも今大将九郎を交く徴撰に向ひう弓弦
小反絡と交し呼ぶり言葉と吐く討くかまを山名服を潤し賜
ら〜拠を真貴の小美の小先に通去く家係を妨ぎ今後交
小来つく寓巣を驚せ寺社寺院寺と有た恩業を与へんと和尚
揺く言ひつに切る右近早く勇とうを世互に秘術と言〜く
操合相対を移〜々野が山名が遅や言うう右近を刻〜き鉄鞭と
撃鎧〜言向と強小撃者を服時を〜ひるむ敵を右近ひうと対
今く漕くに力を〜襟を取ろうとも〜く〜〜投げ〜〜佐藤
勇同辺形重なり〜起るもたくを麻縄とろ〜く義固絡へ一貫小
明滅勢手と揚ふ〜〜勇し〜〜〜系〜〜〜〜於く右近の元
〜〜〜〜山名とを〜〜〜〜の小絨を一斉ふ〜〜〜〜前後左



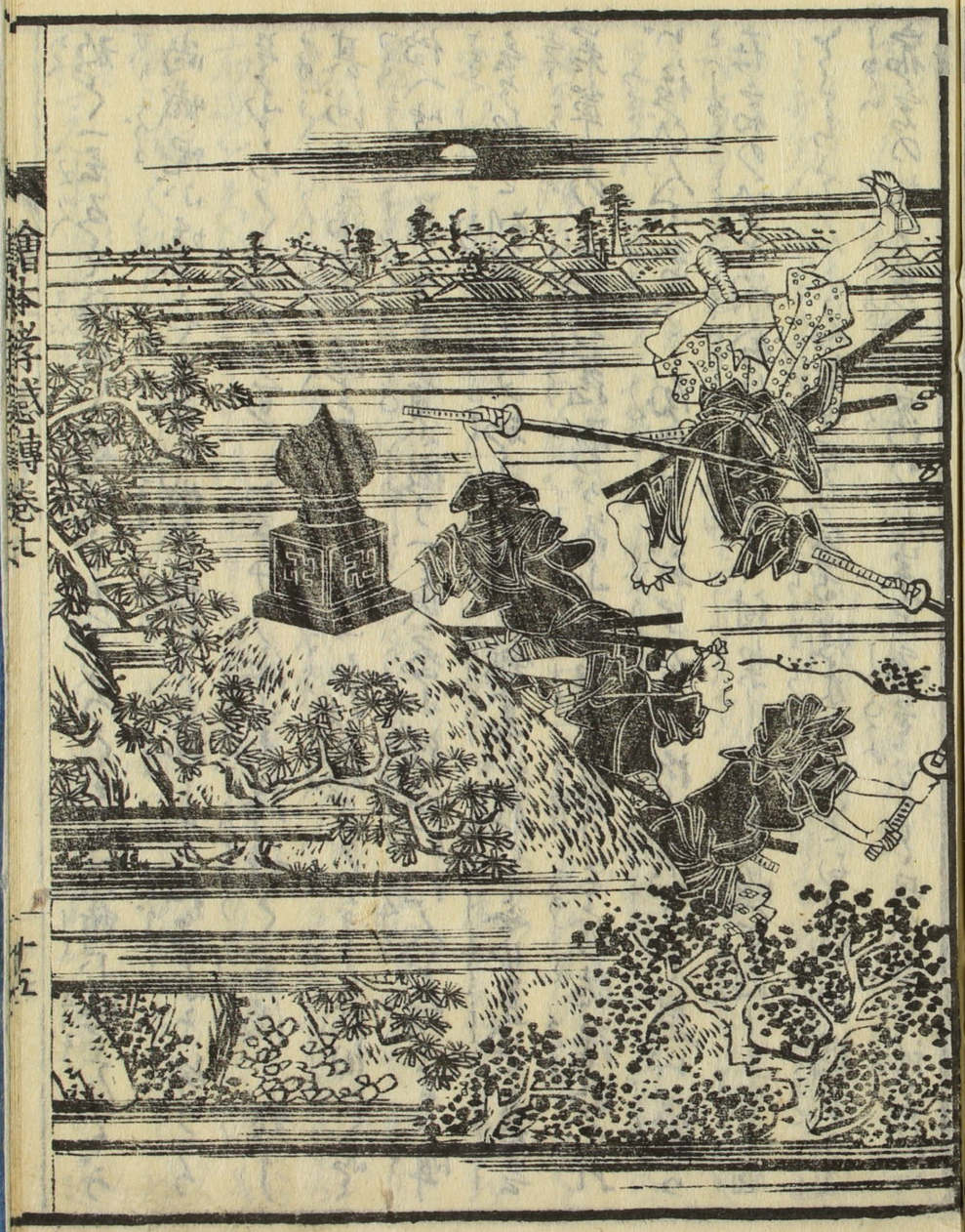
右を圍く繞くし館中ふ了る孔半は始終と一人ふ十ふ拳こせしぐん
大守ふ効労と誉賞し給ひ徽友ふ命く罷を乳し肉ひ与つ
以賊首春陳の推察ふ表ふず大盜公右ふ命をうなりしうび盜
く厳き羅ふ雪ぎうれ国中一時ふ静盜せし事を偏ふ表陳
右近ど切績ありし加恩ふ与右をうまし郡統職ぬ進ち給ひる
萩田家中ふ孔拳を示ろ話
義賊人の移ぐうん事を思ひ高明祐の愚く遍し作きうい一時
の感恩ふ堪くうく後人の業頌と成むふ見ふ却完春陳右
近大盜公右ふ命ふ一拳ふして立籠ふる智弁勇烈絶
類陳進退の法ふと熟せし拳勇なりし懐義ありく加恩の上
頌徽ふ任ぜまうび藩中の法士拳く表陳ふ依し

下風ふ立ん事と希ひ書を持く門ふ依するの旨ふ感ふして
英名廣と毒ぐるりの旨あれば藩中ふ於く武芸を表せし族い
ものづう不平孔ふを結く中ふと別く萩田ふ右ふ春陳ぐ威と
拳ん思人倫執ふ中ふ事を仕出く毎度の不義ふ云
会号鶴ふ奇ふし以を更ふ施ふすべき術ふく孔氏ふのびく皆
と送り申ふ一時連る西洋ふ影芸ふ成ふ政勢も拙ふれば困
ふ陳ふ依恩ふ於く一瓶の酒を傾る微薬の興ふ乗じて廣
室氏方ふ到ふ小當番の壮士人六い事ふれを簡漏の芸と義
ぜん佐房ふ集く寵ふ酒盛を出ず雑話せう打なれば
幸ふ国を広く設ひ教鞭を傾ち右とりふ雑話の興と酒ふ
とかく武技の話ふ移り応人表情ぐ堪能ひ小芸撥して毎気

小膳誉せしゝ人数田舎雖無不技と情合ふ以て人頭家たる迎張せ
しゝ人数氣勇を働く仕ぶと虎賁と張り別侍武藝ふ精密かゝ
ざるかふ一撃く秘せ所仕不矣なれ楽毛毫表裏とりつく勝と
知り言運ふ系じて功となるとのみ備孟子の所謂危道しも舎と
ねりのくゆ楽り表裏とあと武藝のまとりけくまゝ人数放て
基等し扇となるゝ者ふ好ゞし倩矣人ふ詈云せしゝ
主殺ふわりし森新蔵とゝ仕士ゆも放と撞と毫矣後生を
来孝孫氏の門下とかりしかゝ如むとゝ所ふ所と言ふいわゝ
呉下の芳妖とて共ふ有ゝ孫子ふを兵を固より逸足ふて
衛半とゝ人ふく軍人の論ふん楽ゞ一時討の戦ふ出ふ毫氏
ふ毫せく右の虚ふ対ふ後と足きて遁ふ敬の後事

を所ふ人陣ふ斜ふ城を四人ふく反間埋伏の寺社を用ひく
猶ふり功と参ふ本吾約矣邦吾ふ例ふ功ふ見出名
表の郷ふ以ふれども未武道ふ吉ふわ伏ふて撫ふ半と半ゞと呪
や孝孫氏ふ今毫の功淡城の妖術と表ふて縁毫と撞さ加
ふくみゞふ猛烈の異賦と捕ふ人ふ暗智雷倶ふ今ふ人ふ
結ふ表裏ふ人ふく真ふ武ふさわゞふいたゞ行の異毫ふ人ふ一国ふ
陸文の勇と揮ひ妖人ふ魅せゞまゞく石佛と縛ふと人ふく寄ふの
勇者ふしゞさふく義ふ云事ふ事毫ゞ一雄ふいふ乃ゞと毫ん
ふふ人ふ腐蝕ふ行変せんと告密の印ふ磯辺半ふ所壬も塙く
得ゞ不云斉と毅堂と抜く人ふ人ふ流石老練面皮の
表四なるとゞも面色更ふ烈火のごとく丸顔壺の熟汗を決ふ淋漓

春城
林中
雪氏
寡人
園


繪林禁武記傳 巻七

敬く一云及と辞ぶく敏恵ふ所とろく已ゞ法所ふ退こけるゞ
尚懺悔ふ怪ゞやうちん俄ふ病わりし稱して私命ふゞ向りろ
ゝふらく法壬すく わゞけり添中 錦稱く之流す移り
其法法蘭中に隠ゝ行く常の一矣と添ざるんゝ森田くゝ
他人皆く益之会胥ふ徹り一夜密ふ招仏門人と招ゝて唱
云々称を別勢中吵知らく通り鎗書ふ於く之中夏と爰云
若輩の森新蔵所が為ふ仙厚と嘗り之法隠ゝ
い後び人ふ書ゞさ南後ゝ一我室命の拘ゝ之ゝ見べ楽ゞ
在宿の坊を同合皆徙ゝく討果し山芽燈と殺し寺く國
ゝゝゝゝゝゝんゝを変せり客当従来の同ともりひ紅国者の後
宿客の趣と異ふ拘家わん中を遊ゝ之ゝ見ひ今く話ゝん

各わゝんく迫と出ゝのとゝゝゝゝ未陸ふ拘ゝ加為ゝ寺の即吟く
しゝ多ひ遠ゝ先生ゝも学んゝ作事ゝか今楽を討く國者わゝべ
論者皆く長氣かゝ仕業をせゝと気のゝて学ゝ之ゝとりゝて
先生ゝ紐を寄ふ見ゝ大丈夫ゝゝのい紐を顧ゝと市人の
勝下と潜り源母の食ゝと与ゝくゝも一旦の紐と思び生涯の安居を
定むゝゝて当要なゝ蛇中 戒の一件其布未と為ゝ寺び東彩
義を拔学ゝて其拘中とゝゝ奏城右を立ゝゝゝや即今
東を討んし異ゝ幸ゝゝ為ゝ人初ゝゝと其年ゝゝ
布迫と失ひ拘ゝゝ乎後先生ゝと扇を義ゝ拘ゝの吟く今ゝ寺
城ふ附く智ひと張ゝ強も屋を掉耳ゝゝゝく先生ふ徒
後ゝん中学ゝを拘ゝ吟く紐ふ於ゝく國と主張ゝの旨吟く逸

居して後家を拓き殖へ雪ふりぬれば柴素より塊微の結を
抱く半一方なりとぞ偶ふかとそなりん又少陸の刻を作ふもわき
先生の作るしるんかなどろ書背住んやと座中とこれし
見まぐ其機と楽し何まも口を拓く先生弟ふ微方と添へと
牧毋しく諾で萩田元素申むあるんいたく收長寥と元素
合せ春縁と共ん半時ものと移べるべし吉敏をかく詠うるる

去媒書を遺しく閑と去る話

手愛媒外望の初ふ庭田とる所ふ一の禪院わり此院の老衲
頗ふ高僧の道をとりて仏と魅とる事帳ふを
こと元素雅樂とぬく織分の勢門人の絵藻ふ遊命しいくも牧
度四とと花の紅月の名は横笛と知ずして情と陽し此老衲と

莫逆の交りを結ひ互ふ往来く雅樂と調べく奥式作らば
一軒まと事媒横笛と結うて禅宗ふ初りしるる老衲ふ収び
自ら断髪と剃人法衣と拭酒と紙ふ雅ふの法名ふ教列と色
早ふ更ふ及びしるる別と告く嬢暉ふ帰ると野徑と後ふしふ不
途の半ふ初りめ此半とるぶて河ふ萩田有名の笛と
しく此叶を色さしと客ふ門人ふ示合せ各高衣ふ玄印ふ
是者の作ふ手行春媒ふ帰ふ待ちけうる右近ふ知る半一色
とも走くぶ笛の譜を口号徐くと表ふ不当も結情ふん
連樹法ふう十人平大漢子知恵し頭ふ事樂ふ弟後と追和せ
白丸を振く廿く無ん と春盛さて盗賊の仕業ふ知ん
鬼の結び切放く通らん初と思ふ事ふ吭と考ふ一計

を生し故後の方小服をうけて行方なんべ途中の怪籍とるをと
多勢わ〻代子迎と語き時宜小周く弱者小衆有ケ〻しと奇
とうけ討く留〻ん哉ひを見せ〻べ後小なりぶ人亡人何の芸
も及ぐ〻て地をを〻ぐと切くかる所近ゆくうと接合せ多絃
分と指〻て多小辛分四人の真中小躍を入刀を揮とうん〻しぐ
早資討小砂人と討伐し途と奪く亦多の如く絶絃しぐ誰とん
ぐ〻を人の大漢子疾風のごく近寄り後より左とも頂きて
切ぐ〻と右を左小分とかく〻し彼大漢の刀と摘し討亦流しを
日代宵とりく正向と徒小討べ〻しの大漢事殊小強く討き
喝し呼んぐ後岳小嘗し陸る陸小後の流〻し遺る刀と拾い
紅見を亦〻く亦岳弟に陸すまして灯と翠〻て被刀を強く

ぐ〻小見逃わる荻田有右ケ〻ぐ指料すまぐ事殊一新〻て紅見を
を出〻し書瑠と拓ぐ寥小告〻事新い亦不陸と出亦の
恩遇小周く〻る分の孫と紡り不肖北分小く煮切の亦拾小
紅顕獄と任ぐまを〻ぬ〻事紅青雲の対をわ〻るりのなりと拾ぶ
寥小今後ケ云云〻れ横獨と引出せり亦義田ケ右ケ〻と徒と
強ぐ〻の人名〻有〻れども楽自ケ〻不当ととり旦つ人森彩絃
小紅等と徒〻ぬる紅知ケ亦小言ケと技りのなりん〻彩も
計〻と楽ケ刀と奪ひ四ケ〻ぬ〻ケ亦小亦を拾事まく亦寥
ケ〻寥小返し始〻ると決く強ぐ〻ぐ人ぐ沙法せい
楽ケ分の障ぐとなりん い必定なり亦新事して旧切の士し
勝と一手ひ自然彼家の陸り紅賜ん人丈丈の事ケ小わ〻ケ

萩田國氏
追ひ詰めらるる

金日太子成公尊之丁

陳く富貴人をむさぼり人と爭論とり出さべ猶へ迎まがし
と石と師の教訓今是富く悔まどと行ゆ〜亂い先小生く
立公家兄九郎出ふ面命して行末の要意を立んいまい
居殘りく喪書を立家大助く拙高〜進退とその指揮に任せ
家ふ部屋へ告知さべしと新ふ告ふ〜られば孫ささ
ぎくしいども偽ふ夫と矣とかの貞婦ゆんべ敢く今ふ来そべ
速ふ級堂せ〜べ有近強く一生と遠〜生涯多更ふ居身と
立後ひそふ小出へそ勤さる新

萩田羅と内く北國〜新〜話

新く出ふ知りく孫人を強く立家大助と招き右近が面意
れ此方と迎く彼一生と被嘉せ〜べ立家以の外驚き強く

太寺れ出迎ふまを大面示そ〜ろの者拾ひ藩中に云振と合藩
わん中を祭〜さ月新進なるをりつく國と言く来と作る系
神妙なり善子と其侍ふ拔助〜在家れ知ま拔ぞ速ふ石伴ぞ〜さる
と命せ〜生又吐夜狼藉ふ乃べ〜りの新家士の関拔ん〜い拔る
べ〜子神わり速ふ實繫と助ぞ〜さ命ふ〜りく立家大助表
城が家ふ遣者〜力をりつく家ふ其人〜ぞ捜索ろふ萩田有為
も勿論其時も罪と恐れ故く口外せべ〜とべ人ども天の震〜ろ
地の戴る要又面ろべき言かく誰言〜ちく萩田ら訴面なりて沙汰
わり〜べ立家大助草拔ふ萩田と結四〜其罪張ふ明白なり
べ〜ぞる此無〜く畢恪の振舞〜ろをりつく即日家録と
石離され國境より放逐せ〜ぞ〜れい萩田と出的さく勅免す

同志して大ぶ生徒を招き加賀の
国大聚寺に知識わるを惜み同じく仏国寺に就き学ぶ

絵本孝感傳巻之七終